

Zora Neale Hurston 研究

——アフリカ性からアニミズム的世界へ——*

前 川 裕 治

A Study of Zora Neale Hurston

——From Africanity to the Animistic World——

Yuji MAEKAWA

ABSTRACT

Clearly, Zora Neale Hurston uses her African background for her works. At the same time, we notice that there are some familiar aspects shared by Hurston's world and Japanese society. The familiarity of Hurston's world to the Japanese becomes particularly evident when we examine *The Legends of Tono* by Kunio Yanagita. Furthermore, we can find that Hurston's and Yanagita's world shares several aspects with southeast Asian world, where people still believe in animism. This tells us that both Hurston and Yanagita are most likely to intend to reconstruct the ancient religious faith erased by Christianity in the western world and to practice the theory of co-existence on the basis of the animistic way of thinking.

I は じ め に

Zora Neale Hurston の *Their Eyes Were Watching God* は、集団という力の中で押し潰されまいとする Janie の姿を描いている作品として読むことが出来る。彼女が自分を守ろうとする態度の中に、現代人の個を守ろうとする傾向が感じられるからである。この時、Janie は個の確保を探求する現代人の陥り易い孤独に陥っていないことがこの作品の解釈の上で大切なところである。また、*Jonah's Gourd Vine* や *Mules and Men* に眼を向け、Hurston の経歴的なことを調べてみると、彼女がアフリカ性を前提とした黒人の identity を考えていたことが分かって来る。しかし、アフリカ性を identity とすることに Hurston は単に留まっていない

のではないかという印象を読者の頭の中から拭い去れない。それは、彼女の書く物には我々日本人にとってどこか親近感があるからである。まず、そういった印象を造り出している例を幾つか挙げてみる。

Jonah's に出てくる Lucy が死を迎える時周囲の人達が彼女に対して行う行為は、日本の風習とよく似ている¹⁾。また、Aunt Pheemy のような産婆は、日本にはかつては沢山いたし、産婆でなくても、近所のおばさんが産後の世話に関する知識を充分に持っていたし、その家のおばあさんも産婆の役をこなしていた。アフリカ性をもっと濃く描き込まれている *Tell My Horse* を見ても、日本人が親近感を持って読める場面が幾つも出てくる。第4章では duppy の墓に酒をやる習慣が説明されているが、日本でも墓に酒をかける習慣がある。また、duppy を喜ばせる為に食べ物を供えているが、日本でも墓や神棚に食物を供える習慣がある。また、死んだ祖先を神的に捉える面や、神が日常生活の中に、太陽の神、水の神、自然の神などとして、多数存在することなどは、我々日本人にとって納得しながら読むことが出来るところである。また、*Mules* の最初の半分を占める法螺話の内容にしても、call-and-response で行われる形式にしても、日本では今でも日常的に行われていることなのである²⁾。

Hurston を読んで外国人がこういった印象を持つということは、Hurston の世界はアフリカ性にのみ限定されるべきではなく、もっと広い世界を対象にし得る普遍性を持っているということだと思えるのである。この小論ではアメリカ白人でもアメリカ黒人でも、アフリカ人でもない、またそういう祖先を持たない日本人と Hurston を繋ぐところはどこにあるのかを先ず見ていき、続いて、Hurston の世界はどこに通じているのかを見ていく。

II アフリカ性

Hurston がアメリカ黒人の identity を辿って行ったことで、アフリカの identity に到達した点を先ずみしてみる。

Hurston は、“Drenched in Light” の Isis に投影されているように、当時のその他の多くの黒人と同じく、最初は北部への興味が強かったものと思える³⁾。しかし、彼女は Morgan College 卒業後 Howard University に入って、Alain Locke と出会い、Stylus の会員として“the New Negro Philosophy”を学ぶ。Charles Johnson という *Opportunity* の編者と出会い、その考え方を確認していく中で、徐々にアフリカ性の持つ意義の大きさに気付いて行ったものと思える。更に、1925年に Barnard College に入り、Franz Boas に出会うことで、一層その感を確かなものとしたのである。そして、彼女はこれを更に確実なものにする為に南部へと戻って行く。

Hurston の作品を見れば、彼女が自分自身の中にあるものを探求することにかに熱心であったかが分かる。特に、北部に出て来た修行時代の頃書いた初期の短編は、それをよく物語っている。例えば、既述した、2作目の“Drenched in Light”を見れば、Hurston の中にあったものが、一方では、当時の大方の黒人のように北部への期待感であり、他方では自らの中にあるアフリカ性に対する自負心であることがよく分かる⁴⁾。

“Spunk”や“Sweat”でも Hurston の中にあったアフリカ性への傾斜が示されている。例えば、“Spunk”に出てくる Spunk に殺される Joe は、voodoo 教の強い影響の下に描かれている人物である。彼は bobcat として再生し、Spunk を殺すのである。“Sweat”では voodoo 教への関わりが少し間接的に示される。Delia の Sykes への反抗は、Sykes と Delia が「契り」を結んだ教会を捨てることで最終的には成就される。即ち、キリスト教的世界観を否定して、Sykes の死を冷静に見据える行動をとらせることによって、Delia とアフリカ性との関わり方が示される。この場面に接する時、Hurston の狙いは、キリスト教的倫理観に執着するのではなく、アフリカの価値観に立ち帰ることにあったのだということが分かるのである。

こういった、1920年代に書かれた Eatonville を背景にした短編に限らず、*Jonah's*, *Their Eyes*, *Moses*, *Man on the Mountain* といった小説でも、アフリカ性こそが黒人の identity だということを意識して描いていると言えるのである。また、何よりも、*Mules* や *Tell* は実際に Hurston がアフリカ性をアメリカ黒人や近辺の Haiti や Jamaica の人達の中に、見い出しに行った体験記でもある。

Jonah's は特にアフリカの要素が沢山織り込まれている作品である。このことは Hurston がアフリカの identity を如実に描いている *Mules* の方が *Jonah's* より先に仕上がっているという事実を考えると納得出来ることである⁵⁾。*Jonah's* を書く時の Hurston の興味は *Mules* に対する興味と同じだったはずだからである。作品の中にはアフリカから伝わったと思える日常的な行いが沢山描かれている。Alf Pearson の農場の Aunt Pheemy という老婆の産婆の技術にしても、出産後の処理の仕方にしても、Lucy が死にかけている時の、死者に安らぎを与えるとされる儀式にしても、Hattie という女が John に仕返しをする時に習う voodoo のまじないにしても、アフリカの要素がアメリカ黒人の生活の中で実践されていることを証明しているのである。黒人達はアフリカからアメリカに連れて来られて、アフリカの文化から完全に断ち切られたのではなく、彼らの中ではアフリカ性が保持されていたのである。

It was said, “He will serve us better if we bring him from Africa naked and thingless.” So the bukra [white people] reasoned. They tore away his clothes that Cuffy [Negro] might bring nothing away, but Cuffy seized his drum and hid it in his

skin under the skull bones. The shin-bones he bore openly, for he thought, “Who shall rob me of shin-bones when they see nor drum?” So he laughed with cunning and said, “I, who am borne away to become an orphan, carry my parents with me. For *Rhythm* is she not my mother and Drama is her man?” So he groaned aloud in the ships and hid his drum and laughed. (Hurstons: 1934, 59-60)

Their Eyes については *Jonah's* 程顕在的な形でアフリカ性が示されてはいない。しかし、作品の背景としてアフリカ性を Hurston が使っていることは確かである。アフリカの材料として使われていることは、*Jonah's* の場合と同様に、Janie の祖母の Nanny の存在や、法螺話の内容や、Joe が病気にかかった時、voodoo の doctor が出て来ることなどである。これらはアフリカ性がアメリカ黒人の中に依然として存在していることを示している例である。更に、大切なことは、作品全体の構造にアフリカ性が使われているということである。例えば、第一に作品の全体的構造をキルトのイメージにしていることである。作品は人生の経験を終えて、今まで起きたことの意味を理解できた Janie が、自分の経験とそれへの自分の理解を親友の Phoeby に語って聞かせる形式になっている。語り始める時 Janie には自分が話そうとする話の全体の構図は分かっている、その部分部分を Phoeby に示すことで、最終的に一つの絵を Phoeby が造りあげるように仕向けようとしている。第二に、Janie と Phoeby の間やその他の人々の間で行われる対話に call-and-response の形式が導入されていることも挙げられる。キルト同様、アメリカ黒人の間で歴史的に実践されてきたアフリカ文化の一つが、作品の展開の軸として使われているのである。アメリカ黒人の日常生活では、文字文化より口承文化が中心であったという事実を重視し、口承形式を作品の中で再現することで、アメリカ黒人のアフリカ性を再確認しているのである。

Moses ではアフリカ性を Moses の神がかり的力とアフリカの voodoo 教の呪術師の魔法的力とを繋げることで示そうとしている。Moses 自身はエジプトの Goshen で生まれた Hebrew 人であると暗示されているが、Hurston が Moses を描く時、アフリカ性が聖書の Moses にはあるという認識を持っていたことを想像するのは難しくない。Isis がエジプトの大母神を象徴するのと同じように、Moses はエジプト生まれの、いわば神なのである。その「神」がアフリカ性の最も重要な要素の voodoo doctor 的力を持っている訳である。細かいアフリカ性につながる描写を幾つか挙げてみると、Moses が聖なる右手を使って、水を血に変えたり、宮殿や町を蛙で一杯にしたりする呪術師的行為に加えて、Moses の母の Jochebed が Moses を生む時、世話をする産婆の Puah が、herb を使った伝来の医術を身につけていて、それを実践するところや、宮殿の Moses の馬丁の Mentu という Moses の精神的父親と

して描かれている人物の存在や、彼が Moses に話して聞かせる昔話などアフリカ的含みを持った例なのである。

アメリカ黒人の中にアフリカ性が継承されていることが、*Mules* や *Tell* の中でも描かれている。*Mules* では民話と voodoo 教の二つの視点から、アメリカ黒人の中にアフリカ性が受け継がれていることを実体験したことが描かれている。*Tell* では、アメリカ黒人がアフリカよりアメリカ大陸に連れて来られる時のいわゆる前線基地であった Jamaica や Haiti でも、人々の中にアフリカ性が残存していることを、主に voodoo 教を通して見て行こうとしている。

Ⅲ アフリカ性からの広がり

Hurston が作品を書く時、アフリカ的背景を使って書いていることは明らかである。彼女がアメリカ黒人の中に受け継がれたアフリカ性を描写していることを読む場合、読者はそのアフリカ性の描写をどのように受け止めたらいのかという点について、次に考える。

外国人がいわゆる minority 文学を読む時の興味の一つとして、WASP 社会で黒人や native American やその他の minority が何故排斥されるのか、彼らを排斥する時の支配者の意識構造とはどんなものなのかということがある。ここでは WASP が最高の存在として、排他的になっていたところから差別の意識構造が生まれて来たものと思える。するとアフリカ性を最高のものとして、排他的に捉えることは、WASP 社会が犯した歴史上の過ちと同じ過ちを繰り返すことになるのではないか。アフリカ性を唯一無二のものとして考えることは、一時的には成立しても、結果的には排他的考え方として、消滅する運命にあるように思えるのである。

黒人作家がアメリカ黒人の identity を探求した結果、辿り着いたところがアフリカ性だということは理解出来る。奴隷制時代を遡れば、アフリカに辿り着くからである。これは Hurston と同時代の Richard Wright も辿り着いたところである。しかし、彼らの中に新たに生まれた苦しみは、W. E. B. DuBois が言う “double consciousness” の苦しみだったのである。これは別の形で Langston Hughes の中にも窺える自分の identity に関する ambivalent な意識でもある。即ち、二つの内どちらかをとりうとすると、必ず起こる葛藤なのである。アフリカ人的 identity が自分の中にあることが分かっている、アフリカ人にはなれないという苦しみ。自分の中にアメリカ白人の identity が混じっていることが分かっているために、アメリカ白人を正面から否定出来ないし、かといって、肯定も出来ないという葛藤を黒人達は味わう宿命にあるのである。しかし、Hurston の偉大さは、彼女がアメリカ黒人の identity をアフリカ性だと認めたにも拘らず、彼女の中にこの double consciousness の苦しみが殆ど

見られないというところにある。

Hurston は、アフリカ性を背景に作品を描いていても、決してアメリカ黒人だけに興味を限定してはいない。このことは、彼女が直接証言してくれる。

先ず第一に、人種的視点でものを書くつもりがないことを、Douglass Gilbert に送った手紙の中で言っているところから見ていく。

“As for me, I prefer to leave it [racial angle] to the sociologists. As I said, *I view life through the eyes of a person, not a Negro*. I shall continue my studies and my writing on that basis.” [my emphases] (Hemenway, xxx)

歴史的に振り返ってみると、黒人が人種差別によって白人に搾取されてきたことは、事実として何人も認めるところである。しかし、それでも物事を黒人だけの視点で見たのでは、誤った歴史の繰り返しになると考えている Hurston は、かつて奴隷であったことを問題にしても仕方がないと言い切っている。

And why not? For me to pretend that I am Old Black Joe and waste my time on his problems, would be just as ridiculous as for the government of Winston Churchill to bill the Duke of Normandy the first of every month, or for the Jews to hang around the pyramids trying to picket Old Pharaoh, While I have a handkerchief over my eyes crying over the landing of the first slaves in 1619, I might miss something swell that is going on in 1942. Furthermore, if somebody were to consider my grandmother's ungranted wishes, and give *me* what *she* wanted, I would be too put out for words. (Hurston: 1942, 284)

勿論、黒人達は自分の膚が黒いということで自分を否定する必要はないわけである。歴史的に肯定されるだけの十分な実績をあげていることを *Dust Tracks on a Road* の中で指摘している。

(a) The Negro had made the greatest progress in fifty years of any race on the face of the globe. (b) Negroes composed the most *beautiful* race on earth, being just like a flower garden with every color and kind. (c) Negroes were the bravest men on earth, facing every danger like lions, and fighting with demons. We must remember with

pride that the first blood spilled for American Independence was that of the brave and daring Crispus Attucks, a Negro who had bared his black breast to the bullets of the British tyrants at Boston, and thus struck the first blow for American liberty. They had marched with Colonel Shaw during the Civil War and hurled back the forces of the iniquitous South, who sought to hold black men in bondage. It was a Negro named Simon who had been the only one with enough pity and compassion in his heart to help the Savior bear His cross upon Calvary. It was the Negro troops under Teddy Roosevelt who won the battle of San Juan Hill. (Hurston: 1942, 220)

Hurston が主張しようとしていることは、一人一人は自分の問題として、race pride や race consciousness を持つ必要があるが、他を支配する為の Race Pride や Race Consciousness は必要ないということなのである。

... Race Pride and Race Consciousness seem to me not only fallacious, but thing to be adhorred. It is the root of misunderstanding and hence misery and injustice. (Hurston: 1942, 326)

このような Hurston の考え方を念頭に置いて作品を読んでもみると、作品が単なるアフリカ性の継承という視点からのみ描かれているのではなく、もっと広がりをもって描かれているということが分かって来る。その例をいくつか示すことで、アフリカ性を出発点にした広がりを持つ Hurston の世界を確認する。

Jonah's では、一方では John の説教師としての有能さの根拠を、アフリカ性を保持し続けていて、それを生かした説教が出来るところに、即ち、voodoo doctor 的要素が彼の説教師としての豊かさを支えているというところに位置付けている。他方、この voodoo 教と売春婦の Hattie とを関わせることで、voodoo 教に対して否定的意味を付加し、voodoo 教そのものの絶対的力を和らげようとしているように思える。言い方を変えると、voodoo 教そのものよりも、voodoo 教を出発点にして、それに関わる人間の心の問題を扱おうとしているのである。即ち、こうすることで、voodoo 教を読者に押しつけないという効果をあげているのである。

Their Eyes でも同じ姿勢で作品を Hurston が描いていることが分かる。最後に、Janie が Phoeby に話し終わって、二階に上がって行く時の場面を思い出せばいい。彼女は自分の経験を全て Phoeby に示し終わると、後のその判断や解釈は Phoeby に委ねる態度をとって、自分はさっさと二階に上がって行ってしまふのである。即ち、彼女は Phoeby に自分の考えを

押しつけるのではなく、自分が経験したことを示すだけに留まっているのである。それを通して何を考えるかは Phoeby の問題なのである。

Mules にしても、*Tell* にしても、*Their Eyes* で Janie が Phoeby に対してとったのと同じ態度を、読者に対してとっていることが分かる。Hurston は読者に自分の体験を示すことだけに専念し、それに対する彼女自身の解釈を極力避けようとしている。彼女は自分の体験を描写することで、読者が考える為の材料を与えているだけなのである。その後どのように考えるかは、読者に委ねられているのである。

Hurston のこのような態度の中には、白人も巻き込もうとする方向性があったのだろうと考えることが出来る。*Moses* ではアフリカ黒人の呪術師と同じような能力を持った Moses を描くことで、黒人の中に伝わる voodoo 教的能力を再評価する狙いがあることは間違いない。しかし、こういった設定により、白人も *Moses* を読めるスペースが出来ているし、我々外国人も読める角度が生まれている。voodoo 教の doctor に白人がなっていることを説明する *Tell* の中の一つの章も、Hurston の狙いは、単に黒人の問題を扱うことだけに限ったものではなく、人間全般の問題を扱うことにあったということを証明している。

Ⅳ Hurston と柳田とアニミズムの世界：共存の論理

Hurston と日本人読者の印象的親近感については既述したが、その親近感を基に、日本の民族学者の柳田国男が書いた『遠野物語』と Hurston の世界との類似点を見ていき、更にそれをアニミズムの世界と繋げることで、親近感の根源に迫ってみたい。このことは Hurston の世界の普遍性の確認につながるからだからである。

柳田国男は日本では最初で最高の民族学者である。彼は1875年兵庫県に生まれ、東京帝国大学の学生として農政学を学び、庶民的視点から物事をみる傾向を持つようになる。そして、1910年に『遠野物語』を出版している。彼が35才の時である。

彼は初版の序文で「思ふにこの類の書物は少なくとも流行にあらず」（柳田、6）と言っている。また、1935年に出した、再版の「覚え書き」の中で「実際『遠野物語』の始めて出た頃には、世間はこれ〔昔話〕だけの事すらもまだ存在を知らず、またこれを問題にしようとするある一人の態度を、奇異とし好事と評していたようである。しかし、今日は時勢が全く別である。」（柳田、11）と言っている。即ち、彼が『遠野物語』を書いた頃、民衆の間に伝わる folklore を正当な文化として認めない傾向があったと言うことである。Hurston の場合は、1920年代に入って、周辺の anthropologist 達は、いわゆる、native culture にも眼を向けるようになって来たが、その文化が白人的でなく、ヨーロッパ的でない故に、primitive だと言う

視点でそれを見る ethnocentric bias (Witcover, 64) の傾向があった。また、彼女が、*Their Eyes* を出した1930-40年代は、抗議文学全盛時代で、彼女が *Dust Tracks* で “... from what I had read and heard, Negroes were supposed to write about the Race Problem.” (Hurston: 1942, 206) と言っているように、黒人の伝来の folklore に眼を向けることは、黒人を degrade させる⁶⁾ として、否定されていた。このように、民衆の土着の文化を正しく評価しない時代にも拘らず、文化はそれ自体で価値を持っているもので、他との比較で評価されるべきものではないという考え方を、Hurston も柳田も共通して持っていたのである⁷⁾。

アニミズムに対する人々の捉え方も、folk culture に対する人々の態度とよく似ている。人々はそれを未開で野蛮なものとして蔑み、それを信仰する人々を文化程度の低い primitive な人々として排斥してきたのである。その原因は「宗教進化の図式」(岩田, 8) を受け入れてしまっているところにある。即ち、「アニミズム→シャーマニズム→民族宗教(多神教)→世界宗教(一神教)」(岩田, 8) と、宗教は進化して来たのだと言う考え方がなされたためだと言うことである。これは、物事の発展ということに最大の価値を見出す社会の基本的傾向が、宗教の世界でも適用されたのだということが出来る。

発展と言うことと科学的とか都会的とか論理的という言葉や概念は結びつき易い。アニミズム信仰や folk culture が蔑まれた理由の一つは、民衆の日常生活の中でそれらが実践されていたためである。岩田慶治が「万巻の書を読み、山林にこもって瞑想した人の言葉ならともかく、田んぼに入って泥にまみれ、槍をかかげて猪を追いたて、血まみれになって生活している人の言葉など採るべきところはないという誤解がある。」(岩田, 172) と言っているように、大衆性が、発展を重視する論理の中で否定されていたと言える。アニミズムや folk culture はその最も代表的な例なのである。

一つ一つの patch である話の中にも柳田と Hurston の共通点を見い出すことができる。特に興味をそそられる点は、自然の扱い方と神に対する二人の態度である。二人共、人間が自然の中で、自然のリズムと調和した生活をしているということを示すために、動物と人間の間を描いている場合が多い。Hurston の *Mules* の中には、mocking birds が人殺しをして地獄に落ちた悪い男を助ける話や (chapter 6), 安息日にも拘らず牧師の忠告を無視して、魚釣りをしていた男が川の中に catfish によって引きずり込まれて死亡した話が出てくる。また、possum の尻尾を切ってバンジョーの弦にしたといった、人間が自然を利用して生きていると言う話も描かれている。更に、動物を擬人化することによって人間生活と動物との関連の深さを示そうとする話もよく出てくる。例えば、chapter 7 の “How Brer Dog Lost His Beautiful Voice” や chapter 10 の “Why the Dog Hates the Cat” などがそれである。動物を人間に置き換えても、話の筋は充分に通ることが分かる。動物を使うことで人間生活に教訓

を与えようとしていると言えるのである。

柳田の話の中にも動物は沢山登場する⁸⁾。例えば、日本独特の架空の動物の河童が登場して、人間にいたずらをしたりする。それで人間が河童を懲らしめたり言い聞かせたりして逃がしたとか、河童が娘に子供を産ませたと言う話も描かれている。また、狼の話も出てくる。狼は人間にとって驚異の象徴として描かれ、人間の道に反したことをしないための予防的役割をしたり、人間の道に反した行いをした人を罰したりする役を担っている。その他、猿や狐や熊と言った動物や、鳥と人間が関わる話も書かれている。これらの話は人間生活が自然と一体化した形で営まれているということを示しているのである。

アニミズムにとっても、人間が自然と一体化するということは、最も大切なことなのである。人間と自然とが一体化しているということを考える時、人間が草木動物と言った自然のものを使って儀式を行う習慣があるということを糸口に考えると分かり易い。Hurstons の *Tell* の世界では、自然のものとして、白い鳩や鶏、オリーブオイル、松の木、コーンミールとか、khus khus という臭いのする草、goat の血などが儀式で使われることがある。ラオスのシャーマン達の場合は、「鶏を頭にかざし、その首をかき切り、白米の上に血をそそいだり……割り竹の呪具を投げたりする。」(岩田, 26)。また、ボルネオのイバン族やタイのクメール族は「死者から離れた魂が自然の物〔稲〕にやどりそれを人間がたべる。」(岩田, 68) ことによって人間と自然の一体化を実践しようとする。その人の住む地理的環境によって、自然の物は異なってくるが、voodoo 教の信者も東南アジアのアニミスト達も、彼らの自然と接することで、自然と一体化しようとしているのである。

彼らにとって、自然は時として、厳しい試練を与える筈だが、その自然は征服の対象ではないのである。あるがままの自然を受け入れ、自分自身の肉体を自然の成すがままに任せ、委ねようとしている。そこには、勝者とか強者、敗者とか弱者と言った、競争の論理はなく、共存の論理のみが存在するのである。

自然と人間は一体化すべきだと考える理由は、Hurstons も柳田も自然を畏敬する面を共通して持っているからである。彼らの世界では儀式がよく行われる。その儀式では自然のものが力を発揮する。例えば、voodoo 教のある儀式では、既述したように、自然の中のいろいろなものが用意されている。自然の中に存在する草木動物の中の隠された力、即ち、魂が、儀式に際して出てくるという発想があるのである。この発想の為に、日常的にも自然の物が人間に何らかの影響を与えるということが描かれている。Hurstons の場合も柳田の場合も、蛇が不吉な前兆として使われる場合がある。また、蛙が雨の前兆として描かれる場合もあるし、柳田の世界では狐が人を陥れる象徴として描かれる場合も多い。このように、彼らの世界は自然の中にある物を単なる物としてではなく、魂を持った物として認める世界なのである。

日本では特に山が重要な役割をする。Donald A. Morse が次のように、日本では山が宗教上重要な意味を持っていると説明している。それは、昔は *shrine* が山の中に建てられていたことを見ても分かるし、山の神を祭るところと称して、山の中の各所に神棚の簡単なものがあったことを思い出してもよい。

Mountains have always been an integral part of the religious life of the Japanese; mountains are the link between men and *kami*[god]. Mountain *kami*[god] are linked, through fantasy and fear, with mountain people. (Morse, xxx)

柳田の場合は、特に山は重要な役割をする。例えば32番目の話では白鹿が死んで山の神になったことが紹介されている。更に、#107や#108は山の神そのものが人間に特別の力を与えるといる話である。

In Kamigoo village there is a house called, “the house by the river,” which is on the bank of the Hayase River. One day a young daughter from this house went to the edge of the river and picked up some pebbles. A man she had never seen before came up, and gave her some tree leaves and things. He, too, was tall and had a red complexion. The daughter, from this day on, had the power of divination. This *ijin*[stranger] was a “mountain *kami*[god],” and it is said, she thus became a child of the mountain *kami*. (Yanagita, 74-75)

Hurston の *Moses* で、*Moses* が山の神から力を与えられるところが、柳田の山に対する描写と直接関わる面だと言える。二人は、自然の中に魂がいるという考え方を発展させて、自然の中の物が神としての役割を演じ、人間に影響を及ぼすと考えているのである。*Tell* に出てくる Rada や Petro という神や、Legba に仕える Loco Atisou という薬と知恵の神や、Shango(r) という thunder の神のことや、Papa Guede という spirit のある石や、木に霊が宿っているという描写などは、自然崇拜という共通の枠の中に入れて捉えることが出来るのである。

日本の社会でも、昔は、自然の中に魂があるという概念が今よりもっと強かったと言える。正月には仏壇だけでなく、台所やトイレにまで重ね餅の供え物をしていたし、道端には多くの地藏さまが立っていたし、山に行く途中には、いわゆる神宿的な物がよくあった。山の中に入っても、山の神を祭ったいわゆる神宿があった。こういった様子は今や日本では、社会の西洋

化、近代化の中で見かけ難くなったが、東南アジアでは自然の中に魂が存在するという考え方がまだ強いようである。

ラオス北部では、村びとはこういうのである。村のまわり、村びとの生活の場にはさまざまなピー（精霊）が出没している。山には山のピー（ピー・ドーイ）がいるし、木には木のピー（ピー・マイ）がいる。石にも、洞窟にも、家にも、舟にも、牛や水牛にも、虎、ヘビにも、その他もろもろの生物、無生物、人工物のなかにもピーがひそんでいることがある。（岩田、253）

彼らはピーと言う魂を持つ自然の物を、神的存在として崇めているのである。

日常生活のあちこちに魂のあるものが存在するという考え方は、西欧のキリスト教を基盤とした世界観では分かり難い考え方である。一神教を基本的考え方とする社会では多神教の世界は分かり難いのは当然と言えば当然である。物事を判断する基本的な物差しが違っているからである。神が一つではなく、複数存在することを認めるかどうかによって、人間の生き方は大きく異なって来ると言っても過言ではない。一神教の世界では基本的に相手の存在が認め難い世界だからである。それは、キリスト教の牧師が、イエス・キリストでも、Buddha でもマホメットでも、誰でもいいから信仰の対象にしないでとは言えないことを考えてみれば分かることである。これに対して、多神教の場合、他を認める心の幅があるのである。即ち、多神教の社会では共存の論理が社会の基本だと言えるのである。

柳田と Hurston の共存の論理は、作家としての態度としても表れていると言える。佐々木から聞いた『遠野物語』の話一つ一つは、柳田自身の感覚を経て表されているが、実際に人々の間で語り継がれていることを、なるべくそのままの形で伝えようとしている。柳田は『遠野物語』の初版の序文で次のように言っている。

この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治42年の2月頃より始めて夜分をりをり訪ね来たり。この話をせられしを筆記せしたり。（柳田、5）

柳田のこのような、読者に生の材料を提供しようとする態度は、Hurston が *Mules* や *Tell* を書くときの態度とよく似ていると言える。Arnold Rampersad が *Mules* の “Foreword” で “Above all, some readers find Hurston insufficiently analytical.” とか “Her approach, some would say, was journalistic rather than scientific.” (Rampersad, xxiii) と言っているように、Hurston は自分が見たり聞いたりしたことを、生の材料のまま伝えようとしているの

である。Amelia Marie Adams はまた次のように、同じ意味のことを言っている。

Hurston sat back and told the story in the words of the people. By omitting the layer of outsider interpretation, Hurston allowed the reader to be on the culture directly from the speaker. This idea that the people can define their own community and cultural values is one of the principles of Native Anthropology [my underlines] (Adams, 40)

彼女のこの態度は小説でも見られる一貫した態度なのである。物事を「あるがまま」に描くことで、異質なものととの共存の可能性が生まれて来るのである⁹⁾。

アニミズムの世界でも「あるがまま」が大切にされるということを岩田は遠回しに言っている。

現代科学の致命的な欠陥、それは、「ナゼ」と問い、「ナゼナラバ」と答えることである。言葉によって分類し、命名し、断片化し、バラバラにした上で、それぞれのピースを接着剤ではりあわせる。ジグソー・パズルのやりかたである。(岩田, 207)

Hurston と柳田の狙いは、一つ一つの piece を読者に提示し、それを読者に、読者自身の一つの絵として完成させることなのである。このことは『遠野物語』にも、Hurston の書いたものにも、伝えられた話にタイトルが意図的につけられていないことを見ても分かる。柳田は「遠野」と言う村の話を読んだ読者に、その話一つ一つによって、読者自身の「遠野」と言う村を構築させようとしているのである¹⁰⁾。Hurston の場合も、アフリカ性を伝える話一つ一つを読者に示すことで、アフリカ性を持った、読者自身の黒人社会を再構築することが狙いなのである。即ち、作家が「あるがまま」に物事を描くことによって、その話を作家に伝えてくれた人達を生かすことが出来、作家自身も伝えるという作業で自分自身を生かすことが出来る。読者自身も作家が伝えた話を自分の解釈を加えながら読むことで読者の世界を構築することが出来、読者も自分を生かすことが出来るのである。三者の間で共存の論理が働いていると言えるのである。

自然と人間の間を描く柳田と Hurston の話の中で、更に興味を引く共通点は、人間が死亡すると自然の一部になるという発想である。例えば、柳田の#51の話では、オット鳥 (otto bird) が描かれている。この鳥は、最も寂しい声の鳥である。昔、長者の娘が男の子と山に遊びに来ていて、道に迷って男の子を探して鳥になり、オットーンと鳴いているという。

Hurston も *Mules* の chapter 10 の “How the Squinch Owl Came to Be” というタイトルの話の中で、騙されて凍死した Miss Pheenie という未婚の老女が、owl に似たものになったと言う話を描いている。彼らは死後の世界を自然の中にあるものと捉え、その自然の中に死者の魂が宿っているという考え方を基本的にしているのである。

アニミズムの世界でも、死者の魂は自然の中に宿っていると考えられている。ボルネオのムルト族も死者の魂は自然の一部になるという考え方をしている。

...人が死ぬとその人の魂は肉体を棄ててキナバル山にのぼる...そこが魂の住むところである。魂はそこに住んでから、時を得て山を下り、山麓の野に赤い花となって咲く。その花を摘んで食べた女性が、花の、したがって祖先の魂を得て妊娠し、出産する。(岩田, 58-59)

ボルネオのイバン族は、大昔は首狩をして、野蛮な民族とされたが、彼らの中にも死者の魂は自然の一部になるという考え方がある。彼らは毎朝粥を精米して食べるという。何故かと言うと、稲の中に死者の魂が宿っていると信じているからである。

...人が死ぬと魂はからだを脱け出して山にのぼり、雲になる。雲はやがて稲の上に棚引き、そこで稲の魂になる。稲魂は刈り入れののち、屋根裏部屋にはこぼれて大簞におさめられる。モミが精米され、炊かれて人間の口に入る。そこで稲魂が人間の魂にもどる。稲の魂が人間の魂になると言ってもよい。魂が人と稲のあいだを往来するといってもよい。(岩田, 248)

更に、興味をそそられることは、Hurston の世界でも柳田の世界でも、現世の人が死者と交信出来ると言う点である。Hurston の作品の世界では、一部既に示したように、人は死亡した後でもこの世に何らかの形で存在し続けるという場面に接することが出来る。*Tell* では葬式の場面で塩を使わない話がかかれていたり、*Jonah's* では死者の頭を東に向けるとか、枕を死に向かっている人の頭から外すと言う場面が描かれている。“Spunk” では殺された Joe が実際に bobcat となって再生し、Spunk に復讐していることを暗示する場面が描かれている。Hurston の世界は、このように、人間の死後の世界の存在を強く意識したものなのである。人間は死亡した後でも魂という形をして、この世に存在し続けるという考え方をしているのである。*Tell* で Hurston は “It all stems from the firm belief in survival after death. Or rather that there is *no death*” (Hurston: 1938, 43) と言い、死後の世界の存在を信じているこ

とを証言している。

柳田も同じように死者との再会を#99で書いている。福二という学者の息子は結婚した後、津波にあって妻を失ったが、その妻と一年後に海岸で再会したと言う話である。その他にも、死者と再会した話はいくつか書かれてある。また、死亡した人が山の精として生き続けているとか、山の神になって人々を見守っているとかと言う話も書かれている。また、死者の変身である山女とか山男の話もいくつか紹介されている。

彼らにとって、死者は存在を終えたものではないのである。彼らは、人間は死亡すると全てが終わりだという発想を持っていないのである。死者は外見を変えて、現世に存在し続け、人間と交わるという考え方をしているのである。

アニミズムの世界でも、人間は死ぬと、肉体は朽ちても、魂は残り、現世の人々と心を交い合わせることが出来るのだと考えられている。Hurston の世界での死者の扱い方と非常によく似た儀式がマレー半島中部に住むスムライ族の間でも行われている。

.... スムライ族は死者の亡がらを舟材でつくった棺に入れて埋める。そのとき、足を西に向け、手の近くに一包みの米とランプを置く。死者の魂は、やがて、立ちあがり手にランプと食糧の米を下げて、足の向いたところ、つまり、西へ西へと歩きはじめる。その歩の到達点がスルガという他界の山なのである。死者の魂はスルガで生きのび、やがて再びもとの村に帰ってきて再生する。(岩田, 59)

スムライ族も死後の世界の存在を信じ、人間は死んでも必ずこの世に戻って来ると信じていることが分かる。同じ考え方をしているボルネオのイバン族の「魂の蘇生を目ざす行事」では、現世の人々に死者の魂が乗り移る現象が見られるのである。死者の魂が乗り移ったある女の人「籠のなかにあらかじめ用意された家族の衣裳のなかから、入魂したその人の衣裳をとりだして身につけ、帽子をかぶり、立ちあがって踊りはじめた。....手をあげ、腕を水平にのばし、廻って、その人らしいしぐさをした。」(岩田, 71) のである。また、「夫の魂がとりこまれて舞う主婦がいたが、その一人は夫の好物の酒を立ったまままで浴びるように飲み、もう一人は家から小銃をとりよせて空に向けてズドンと発砲した。夫は猟師だった。」(岩田, 71) という人もいた。

Hurston や柳田が作家として行っていること、即ち、oral tradition を基盤に作品を書くということも、言い方を換えると、死者と交信しているのだということになる。柳田の『遠野物語』の特徴の一つは、佐々木鏡石と言う遠野に住んでいた人から聞いた話を紹介する形式をとっている。しかも、解説を書いた大藤時彦が『遠野物語』の話は佐々木氏が直接聞いた話、

土地に伝えられている話を記録したものであるが、中には佐々木家の近親、友人の話があり、佐々木氏自身の経験もいくつか収録されている。」と述べているように、佐々木が柳田に話す前に、佐々木に話をした人がいるのである。#69を見ればそのことがよく分かる。

In present day Tsuchibuchi village, there are two households called *daidoo*. Manno-joo Oohora is the master of the *daidoo* in Yamaguchi now. His mother-in-law, named Ohide, is over 80 and still healthy. She is Mr. Sasaki's grandmother's elder sister. Skilled at witchcraft, she has shown Mr. Sasaki how she can cast a spell and kill a snake or drop a bird that is perched in a tree. Last year, on January 15th by the old calendar, the old woman told this story: "Once upon a time there was a poor farmer. He had no wife but did have a beautiful daughter. He also had one horse. The daughter loved the horse, and at night she would go to the stable and sleep. Finally, she and the horse became husband and wife. One night, the father learned of this," (Yanagita, 49)

柳田が『遠野物語』で紹介している話は、何世代も前から人々の間で語り継がれて来たものである。これは、Hurston が *Mules* や *Tell* で行った彼女の周りの人々が語る話を紹介する形と直接的に通じることなのである。また、*Their Eyes* で、作品全体の構造が、Janie が Phoeby に話し、Phoeby が Hurston に話し、Hurston が読者に話すと言った枠組みになっていることも、柳田の場合と同じく、oral tradition を基にして、世代を越えて語り伝えられるということが重要な役割をはたしているということを物語っている。

語り継がれてきた話を遡って辿って行けば、そこには祖先の人達がいる。だから folk tales を語り伝えると言うことは、祖先と交信することであり、祖先を現世に呼び戻すことなのである。

ここで大切なことは、彼らは死者を過去の存在として捉えていないということである。彼らにとって死者は現在も生き続けている存在なのである。

彼らの死者に対する捉え方を造り出しているものは、彼らの中にある従来とは異なる時間の概念であろうと思える。即ち、従来の時間の概念では、時間を現在、過去、未来として chronological に分類して捉えようとする。これに対して、彼らは時間を区別して捉えておらず、現在、過去、未来が一体となった時間として捉えている。chronological な時間の概念は物事の序列化を生み易いと言える。例えば、我々は日常的に古い物と新しい物とか先着か後着かを比較して、優先順位をつけることを考えると分かり易い。時間を chronological に捉えず、

一つの unity として捉えると、従来の区別が出来なくなる。すると、これまで時間の優先順位で否定されていた事柄や人も、存在の権利を得ることになる。今まで chronological な時間の基準から判断して、敗者として扱われていた人も、敗者という否定的レッテルをはがすことが出来るのである。ここに存在の可能性が広がることが分かる。これによって、今まで共存出来なかったものとの共存の可能性も広がってくるのである。

V お わ り に

Hurston は *Mules* の中で、作品の材料を集める時の態度として次のように言っている¹¹⁾。

The best source is where there are the least outside influences and these people being usually under-privileged, are the subject. (Hurston: 1935, 2)

“the least outside influences” とは西欧的価値観を意識して使った表現だと思える。

Karla F. C. Holloway は Hurston のアフリカ的世界を称して、“the ethnicity that unifies his spirit to the non-Western world” (69) と言っている。また、Joan S. Boudreaux も同じように、“Hurston, through her study of her heritage, shares, through John Buddy the value of respected spiritual leader and healer in a social group to help us rediscover wholesome, ancient models outside the fragmented western psychic tradition” (56) と言っている。彼らの言う反西洋的価値観とは、別の表現を使うと、アニミズム的価値観ということが出来るのである。

また柳田に関しても、『遠野物語』の英文訳版の“Foreword”で Richard M. Dorson が類似したことを言っている。

In particular he[Yanagita] stressed the opportunity to reconstruct the ancient religious faith, pretty much erased by Christianity in the western world but discoverable and decipherable in the pre-Buddhist mountain and ancestor worship still practiced in Japanese village. This was the target and the method of his school; historical reconstruction of the old animistic religious system, the *minkan shinko*, from which external accretion imposed by outside cultures must be peeled away. [my underlines] (Dorson, ix-x)

Hurston と柳田はアニミズムの考え方を基盤にして、共存の論理を追求していたという点でつながっていることが今までの分析で分かる。彼らの目指した共存ということの狙いは、別な言い方をすると、反西欧的世界の実現という言い方も出来るのである。反西欧的なアニミスティックな共存の世界は、人間の心を蝕む無益な競争である、弱肉強食の論理のない、安らかな世界なのである。

Notes

- * この論文の一部は1994年1月24-30日に Florida 州 Eatonville で開催された The 5th Annual Zora Neale Hurston Festival で口頭発表したものである。
- 1. 日本の葬式に関する簡単な全体像を *JAPAN, All Illustrated Encyclopedia* からの引用してみる。
 ... Upon death the body is washed with hot water (*yukan*), then dressed by family members in white garments (*kyookatabira*) or in his favorite clothes. More recently it has become the practice for physicians and nurses to cleanse the body for morticians to dress it.... The body is laid out with the head toward the north without a pillow and is covered with a sheet of white cloth. A priest from the Buddhist parish temple recites sutras at the bedside and gives a posthumous Buddhist name (*kaimyoo*) to the deceased. The body is then placed in an unpainted wooden coffin. A notice of mourning, written on a piece of white paper with a black frame, is posted on the front door or gate of the house throughout the mourning period (*richuu*). An all-night wake (*tsuya*) or a briefer "half wake" (*hantsuya*) is held.... After CREMATION pieces of the bones of the deceased are gathered, placed in a small jar (*kotsutsubo*), and brought home for later burial. Every 7th day until the 49th day, rites are held around the altar where the *kotsutsubo* is kept.... The *kotsutsubo* is buried at the grave site during this period. (431)
- 2. 例えば、日本では昔話を語りと対話の形式で映像化し、漫画番組としてテレビで流している。また、昔から日本では漫才や落語と言った語りや対話を中心とした大衆演芸が民衆の娯楽の一つだった。これらはいわゆる口承文化の一つであり、call-and-response の形を基本的に受け継いでいる。漫才と落語については、*JAPAN* の921-922 (漫才)、及び1246-1247 (落語) が参考になる。共に民衆の娯楽であったことの説明が簡潔にしてある。
- 3. これは白人への志向という言い方をすることも可能である。Isis の志向を見ても、北部に行きたいという当時の黒人の志向と変わらないからである。こういうことを経て、成長して本当の自分とは何かとか、自分が大切にしなければならないものは何かと言ったことに気付いて来ると Hurston は言いたいのであろう。
- 4. Isis の identity がアフリカ性にあることは明確である。彼女の名前は、古代エジプトの豊饒の大母神に由来するものであり、彼女自身 voodoo doctor が持っているような、人々を堪能させる能力を潜在的に持っている。実際に彼女はパーティに参加して、踊りの中心になり、みんなを喜ばせている。また、気分の悪いという白人女性の Helen は、Isis に会うとすっかり快復し気分がよくなっている。Paul Witcover は Isis のこういった力を、“the magical power to transmit by joy and happiness” (49) と言って、Isis の中にアフリカの内面を認めている。
- 5. *Mules* は1935年に出版されているが、1932年に既に完成していた (Hurston: 1942, 208-209)。 *Mules* は1927年から Hurston が南部で始めた folklore 収集の成果として出版されている。こういう中で *Jonah's* を書いていたわけで、*Jonah's* に当然アフリカの要素が沢山含まれているということは不思議

なことではないのである。

6. Richard Wright の Hurston への批判が一般的によく知られている。彼の批判のポイントは白人が期待するような黒人を Hurston は描いていると言うものである。

Her characters eat and laugh and cry and work and kill; they swing like a pendulum eternally in that safe and narrow orbit in which America likes to see the Negro live: between laughter and tears. (Wright, 22)

7. 柳田は『遠野物語』出版の一年前の1908（明治41）年に九州と四国を旅行している。その成果として、『後狩詞記』を翌年に出版している。柳田は『遠野物語』の狙いを「予が出版事業」の中で次のように言っている。

「西南の生活を写した後狩詞記が出たからには、東北でも亦一つ出してよい。三百数十里を隔てた両地の人々に、互ひに希風殊俗というものはないといふことを、心付かせたいといふやうな望みもあつた。」（大藤，208）

宮崎には宮崎の文化のよさがあり、東北には東北の文化のよさがあるわけで、比較できるものではないという考え方を柳田がしていたことがよく分かる。

8. Hurston の *Mules* の中に描かれた話と比べると、柳田の話は少し異なる。柳田が *legend* と *tale* を区別したように、柳田の話は、伝説を説明する形で、Hurston の *Mules* の前半部分は昔話である。*Mules* の後半部分や *Tell* は柳田の伝説的話に近いが、彼女の場合は、旅行記的要素も加味されている。

9. Hurston には作家として「あるがまま」に物事を描こうとする態度があるということを前提として取りかからないと、迷路にはまり込むことになる。読者には彼女が、正反対のことを躊躇うことなく発言したり描写したりすと感じられることがよくある筈である。例えば、アフリカ性がアメリカ黒人の中に受け継がれている大切な面だと言っているかと思うと、黒人の英語の美しさは黒人だけのものではなく、南部英語の美しさで、それはイギリス英語が残っているからだと言って、黒人の中のアフリカ性を否定する発言をする。（詳しくは *Seraph on the Suwanee* の Hazel V. Carby による“Foreword”が参考になる。）彼女はしばしばこのように正反対のことを表現して読者を惑わしているように見える。しかし、ここが彼女が物事をあるがままに伝えようとするところなのである。世の中のことは必ずしも右と左の区別が明確に出来るとは限らないのである。アメリカ黒人の場合、identity をアフリカ性のみに固執出来ない面もあるのである。それを、アフリカ的・英国的のどちらかに決めること自体難しいことなのである。そのため、彼女はそう言った、決定困難なことに対して、どちらかを選ぶのではなく、「あるがまま」に両方の考え方を並列的に描こうとしている。そのため、一つの事柄に対して正反対な考え方を描くことにも時としてなるのである。西欧的な、片方のみを選ぶ態度ではなく、両者を選ぶという東洋的な態度を彼女はとっている。即ち、彼女の中では共存の論理が働いているのである。

10. *The Legends of Tono* の“Foreword”を書いた Richard M. Dorson は次のようにそれを証言している。

..., Yanagita's first book remains the only one to capture a whole body of village legendery from a single teller. (Dorson, xi)

11. Arnold Rampersad は *Mules* の“Foreword”で別の表現を使って Hurston の目的を表現している。
“He[Boas] urged that cultures be seen on their own terms and not according to a scale that held European civilization to be the supreme standard.” (xviii)

Works Cited

Adams, Amelia Marie. “Zora Neale Hurston: A Native Anthropologist” in *All About Zora*. ed., by

- Alice Morgan Grant (FOUR-G Publishers, Inc., 1991).
- Boudreaux, Joan S. "Identification of African Ritual in *Jonah's Gourd Vine*" in *All About Zora*.
- Carby, Hazel V. "Foreword" in *Seraph on the Suwanee* by Zora Neale Hurston (Harper Perennial, 1991).
- Dorson, Richard M. "Foreword" in *The Legends of Tono* by Kunio Yanagita and translated by Ronald A. Morse (The Japan Foundation, 1975).
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston, a Literary Biography*. University of Illinois Press, 1977, 1980.
- Holloway, Karla F.C. *Moorings and Metaphors: Figures of Culture and Gender in Black Women's Literature*. Rutgers University Press, 1992.
- Hurston, Zora Neale. *Spunk*. Turtle Island Foundation, 1985.
- . *Jonah's Gourd Vine*. 1934. Rept. by Virago Modern Classics, 1987.
- . *Mules and Men*. 1935. Rept. by Negro University Press, 1969.
- . *Their Eyes Were Watching God*. 1937. Rept. by University of Illinois Press, 1978.
- . *Tell My Horse*. 1938. Rept. by Harper Perennial, 1991.
- . *Moses, Man of the Mountain*. 1939. Rept. by University of Illinois Press, 1984.
- . *Dust Tracks on a Road, An Autobiography*. 1942. Rept. by University of Illinois Press, 1984.
- . *Seraph on the Suwanee*. 1948. Rept. by Harper Perennial, 1991.
- . *The Sanctified Church: The Folklore Writings of Zora Neale Hurston*. Turtle Island Foundation, 1981.
- 岩田慶治. 『アニメズム時代』. 法蔵館, 1993.
- Kodansha. *JAPAN, All Illustrated Encyclopedia*. Kodansha, 1993.
- Morse, Donald A. "Introduction" in Kunio Yanagita's *The Legends of Tono*.
- 大藤時彦. 「解説」. 柳田国男『遠野物語』(角川文庫再版, 1993).
- Rampersad, Arnold. "Foreword" in *Mules and Men* by Zora Neale Hurston (Harper Perennial Edition, 1990).
- Witcover, Paul. *Zora Neale Hurston (Black Americans of Achievement)*. Chelsea House Publishers, 1991.
- Wright, Richard. "Between Laughter and Tears." *New Masses* (October 5, 1937).
- 柳田国男. 『遠野物語』. 1910, 1993 (角川文庫再版).
- Yanagita, Kunio. *The Legends of Tono*. 1910, Translated by Ronald A. Morse, The Japan Foundation, 1975.
- 柳田国男. 「再版覚え書き」. 1935, 1993 (柳田国男『遠野物語』).